にエネルギーを発散させた。しかしバスは上下左右に快く振動し，間もなく一人，二人と夢の国へ。

登別温泉第一滝本館へ到着したのは，もう夕方近くだつた。階段を上つたり下つたりして，割りあてられた部屋へ。本当に大きな旅館なので一人で歩いていると迷つてしまいそうである。東洋一といわれる大浴場で入浴，食事は各部屋で久しぶりに家族的な雰囲気になつた。「熊まつり」を見学しようと楽しみにしていたが，夕方から又小雨がふりはじめ，止めにした。「明日は，からりと晴れたお天気になりますように。」と悲壮な願いをこめて，てるてる様に「オミキ」を差し上げ，今夜はここでおみやげを買うことにした。

「登別より洞爺湖まで」

短食２の１

憧れの北海道の旅も残り少く，２日になつてしまつた。７月２４日，絶好の良い天気である。今日は登別から白老アイヌ部落，昭和新山，洞爺湖畔のコースをまわる。

朝６時，まだ皆疲れて寝ている頃ホテルを脱け出して，さわやかな朝の空気を思い切り吸いながら，地獄谷へと歩いて行く。足の二倍もあるような，ホテルのゲタをつつかけて歩くのに，ここではおかしくも，恥かしくもないから不思議である。地獄谷とは嫌な名前である。ここに身を沈めたものは，たちまち骨だけになるから，まさに地獄かもしれない。

地獄から天国へと，ケーブルで登り，熊牧場を見に行く。袋をごそごそさせると，気の早いのは人間の子供がするように，坐つて手を上げて待つている。上から投げてやると，手で口に入れて食べる。これらの情景を見ると，クマが獰猛であるとはまるで信じられない。

クマの幼稚園では，小熊が１０匹ほどおり，丁度朝食が与えられるところだつた。それぞれ自分の器が決つており，他人ではなく，他のクマのものを失敬すると，喧嘩になる。

私達も小さい頃は，よくそうしたものだ。残念なことに，人間様の朝食の時間になつたので，下山した。

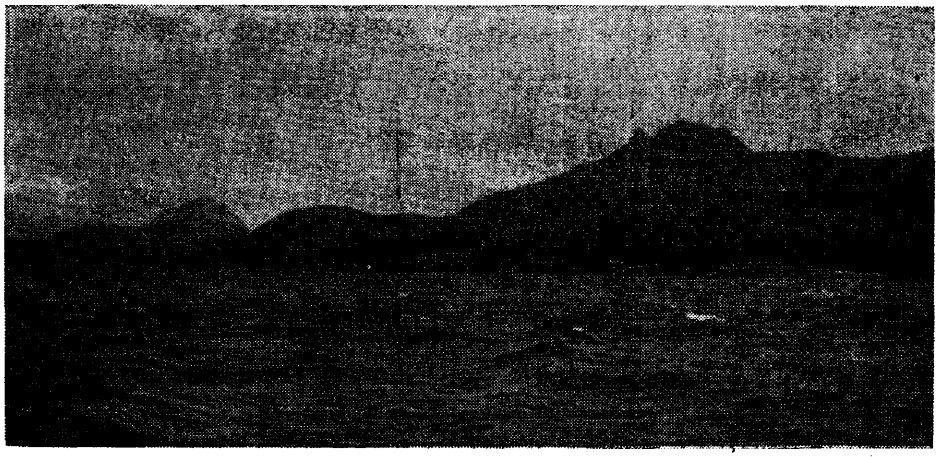
待ちに待つた白老のアイヌ部落を尋ねた。アイヌの民芸品には，目を引かれる物があり，安くしてやるといわれれば，次から次へ，みやげものをふやす気のよい客であつた。部落

は観光用のものであり，多くのアイヌ人は，私達と少しも変らない文化生活を　他の所で送つているそうである。ここに住んでいるアイヌ人の生活に何か哀れさを感じた。特に，私達の為に披露して下さつたアイヌの女の人の踊りを見ても，酋長の話しを聞いても，こうした感情が押え切れない。滅びゆくアイヌ人に，又，観光客に甘んじて生活しているアイヌ人に，もつともつと発展を！と呼びたい気持で一杯だつた。

バスの窓から昭和新山の煙が見えて来る。畑の中に大きな岩や砂を積んだ，山とは言えないような，少しグロテスクな形の山である。そこから煙が出ているのでよけい凄味を感じる。昭和新山は，昭和１９年の誕生だから私達と同じ年令である。麦畑の中にこのような山ができたことを思うと，今更ながら自然の偉大さに驚かないわけにはいかない。

静かな，素晴らしい洞爺湖の遊覧船に乗り込む。ここ洞爺湖は支笏洞爺国立公園に属し，カルデラ湖として知られている。面積69.6Km²の円形の湖で，中心に中島が浮んでいる。この中島は他の湖にない自然の原始林でおおわれ樹種も豊富で，道立の森林博物館が設けられ，北海道の森林が一目で分かるように出来ているそうである。

悪い環境に負けず，すくすく育つている木々に尊敬の念を抱いた。又別の特色として，最新179cm，透明度17cm，湖面標高83cmで，厳冬でも氷結しないと言われている。



（手前が洞爺湖，右の山が有珠岳，左の山が昭和新山）

その湖の色と，周囲の昭和新山，有珠岳，湖水のはるか北の羊蹄山と，入道雲の出た，からつとした空の色とが混ざり合い，油絵より日本画的雰囲気をかもし出している。

この神秘的な風景に，手を合せて，何か自然にすがりたい，魅せられた気持になつた。この思いをそのまま，いつまでも心の奥に秘めていたいものである。

八班　上野・熊本・志村・谷川
斉藤・城野・小森・北岡

北　海　道　の　印　象

短食2の2

せせこましいごみごみした，雑踏の中に意識するともなく，吸い込まれてしまつている事に慣れつこになつていた私は，北海道の広大な美しい素朴さに，じかに触れてふと今までの自己と言うものを，振り返つて見ずにはおれない様な気がしたのである。

岸に寄せる波の色が，そのまま砂に染み渡りはしないかと思われるほどに，青く澄み，樹々の葉や自然の花には，汚れを知らぬ子供の様に，芽生えた時のままの色を保ち，その上には，果しなくどこまでも空が続いている。

これは何処のことなのであろうか。日本にもこう言つた，心の安らぎを感じさせてくれる場所があつたのか等と，感激しながら観望したのである。

普段は1日に何十人，何百人となく，見知らぬ人とすれ違い，それらを強いて見ないでおこうと意識すらして歩くのに，この国では，畑に立つ人，路々を歩く人，山を切り開くおじさん，みやげ売のおばさん；一人一人が印象深い。他人よりもテンポの遅い私は特にこの様なのんびりした繰り返しが，たまらなく魅力に感ぜられるのであつた。

しかし峠に立つアイヌ人，白老のアイヌ部落の人々は，都会の中の孤独な，淋しい人々の集まりを，そのままポイと摘んで持つて来た感じを我々に与えてくれた様である。

7月も終り近くだと言うのに，全く涼しい快適な旅を楽しむことができ，想像をうらぎるどころか，よりいつそうの感銘を与えてくれた北海道の素晴しい自然，この良さが，失われることなくいつまでも残つておいてほしい。又，神秘の摩周湖も，いつの世も変わる